

# 巻 頭 言

## 茨城県立医療大学紀要 第23巻

学長 永田博司

本学の附属図書館の一角にこれまで刊行された茨城県立医療大学紀要を取めた書架があります。今回の23巻も含めるとかなりの幅となり、それは大学の研究の歴史そのものと言えます。多くの大学では本学と同様、主に学内教員の研究成果を発表する場として、何らかの学術誌を発行しています。比較的多くの大学で『〇〇大学紀要』という名称で呼ばれ、それぞれ英文表記の名称も持っています。ところで本学の紀要は英語表記ではなく、ラテン語表記の方式を採り、“ACTA SCIENTIARVM VALENTVDINIS UNIVERSITATIS PRAEFECTVRALIS IBARAKIENSIS”と表されています。ローマ時代に遡ると ACTA とはもともと法令や証書などの公式記録という意味があり、転じて官報や刊行物を示す言葉として使われたようです。さらに遡ると ACTA には行動や活動という意味があり、行動を表す英語 action と同じ語源とされています。ローマ時代には Acta Diurna という言葉がありました。これは、人々の日々の活動を記録し多くの人々に伝える日報や日刊新聞という意味で使われています。Diurna は現代の英語の journal の語源です。acta も journal も現代の学術雑誌欧文名に頻用されているのはご承知の通りで、研究活動の成果を広く伝えるという意味でこれらの2つの英語は“日々の研究活動の記録”という意味で脈々と現代まで引き継がれているわけです。

一方、日本語表記の「紀要」がなぜ学術雑誌名に用いられるようになったのかという理由については、不明な点が多くあります。明治期にすでに「紀要」と名付けられた学術誌がすでに存在しており、欧文学術誌名に使われている acta という言葉に紀要という言葉で充てたものだと思われます。紀要は読み下すと「要（かなめ）を紀（しる）す」となると思いますが、そもそも紀要という言葉が中国古典あたりに由来するのか、いろいろ調べましたがわからないままです。

今回の紀要第23巻では、基礎研究から地域を対象とした研究まで、医療大学の教員による“日々の研究活動の記録”である Acta Diurna として発刊されましたので、ここにお届けいたします。